



グリーグ／ピアノ協奏曲 イ短調 作品16

ノルウェーを代表する国民楽派の作曲家として知られるエドヴァルド・グリーグ（1843-1907）であるが、彼の音楽様式はむしろドイツ・フランスを中心とする西欧的ロマン主義に深く根ざしている。モーツァルトとショパンの音楽を愛好したグリーグは、メンデルスゾーンやシューマンなどの音楽様式を教育理念の根底に置クライツヒ音楽院で初期の本格的な音楽教育を受けた。そして20歳頃からコペンハーゲンを中心にした音楽活動を展開するようになり、西欧の様式の中に次第に色濃く民族色を盛り込んだ作品を発表するようになったのである。

1868年25歳の時に、彼はこの夏を妻と1歳の愛娘と共にコペンハーゲン郊外のソレレードに過ごし、恵まれた自然環境の中で幸福な日々を送りながらこのピアノ協奏曲を作曲したのである。6月から9月までの比較的短期間に書き上げられたこの作品は、翌69年4月3日にコペンハーゲンで初演され大成功を収め、一躍ヨーロッパ中に知られるように

なった。当時の大ピアニストでもあったリストやビュローの絶賛も受けている。

第1楽章：アレグロ・モルト・モデラート

イ短調 4分の4拍子。

ティンパニのクレッシェンドを序奏としてトゥッティの主和音の一撃とともに独奏ピアノが極めてあでやかに登場する。

第2楽章：アダージョ 変ニ長調 8分の3拍子

弱音期をつけたヴァイオリンによって抒情的な主題が歌われる。

第3楽章：アレグロ・モデラート・エ・マルカート

イ短調 2分の2拍子

ロンド的性格を持つフィナーレで、木管による導入に続きピアノがカデンツァ風のパッセージを奏でる。主題はピアノによって大きく発展される。第2主題はポーコ・ピウ・トランクウィロでやや穏やかになってからフルートによるのどかな歌として呈示される。



ドヴォルザーク／交響曲第9番 ホ短調 作品95「新世界より」

アントニン・ドヴォルザーク（1841-1904）はチェコの国民楽派を代表する作曲家のひとりであり、日本では最も好まれる作曲家の1人である。言うまでもなく、彼の音楽には先輩スメタナからの影響が大きく、民族主義的性格が強く窺えるが、アメリカでの生活と先住民の音楽が作品に反映されて彼独自の境地が開かれ、広く世界に受け入れられる素地を作ったと言える。

ドヴォルザークは、プラハの北、北ボヘミアのネラホゼヴェスに生まれた。生家は肉屋と宿屋を営んでいた。幼いころから才能を示し、オーケストラ奏者や個人教授などで生計を立てていたが、1875年、34歳のとき巨匠ヨハネス・ブラームス（1833-1897）に出会ったことが一つの転機になった。ブラームスは彼の音楽性を高く買い、楽壇に紹介の労を惜まず、また個人的にも親しくなった。

1892年秋に彼はニューヨークのナショナル音楽院の創設者ジャネット・サーバー女史に招かれて渡米する。そして1895年春までの2年半に及ぶ音楽院院長職時代に次々と傑作を書き上げたのである。

アメリカ滞在中にドヴォルザークはアメリカの、特に先住民であるインディアン音楽や黒人霊歌の音楽を積極的に採譜、これらを音楽に取り入れて、故郷を思う自らの気持ちに仮託していった。それらが弦楽四重奏曲「アメリカ」や、この交響曲第9番「新世界より」に見事に結実したのである。このドヴォルザークの代表作は1893年中に作曲され、同年12月16日、アントン・ザイドル指揮のニューヨーク・フィルハーモニー協会演奏会で行われた。

第1楽章：アダージョ～アレグロ・モルト、ホ短調、緩徐序奏部つきソナタ形式。広い大地を思わせる序奏のあと、力強いリズムが刻まれて、印象的な第1主題が奏される。

第2楽章：ラルゴ、変ニ長調。このコール・アングレで奏される主題はとりわけ美しく、詩をつけて「家路」という歌として親しまれている。

第3楽章：モルト・ヴィヴァーチェ、ホ短調、スケルツォ楽章。

第4楽章：アレグロ・コン・フォーコ、ホ短調、金管で奏される力強い主題をもった堂々たるフィナーレ楽章。